

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00541

研究課題名（和文）ダイクシスの動的側面への認知類型論的アプローチ：日韓英の指示詞と関連表現を中心に

研究課題名（英文）A Cognitive typological approach to dynamic aspects of deixis: Demonstratives in Japanese, Korean, and English

研究代表者

小熊 猛（Koguma, Takeshi）

金沢大学・外国語教育系・教授

研究者番号：60311015

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：話者・聴者と指示対象との静的位置関係では説明できない指示詞及び人称詞選択に関して、心理的距離や聴者視点という概念で理論的説明が試みられてきた。非規範的空間指示詞選択には、指示対象と話者が「近づく・離れる」という動的要因、指示対象が話者の視線に正対するか否かという方向性要因が関わり、心理的距離用法と呼ばれる特異な指示が嫌悪から「仰け反る」「後退る」といった身体性に根ざす可能性を指摘した。また、英語及び韓国語は発話者が自らを鼓舞ないしは叱責する独白文脈で二人称（対称詞）による話者自称指示を広く容認するが、この背後には発話参与者分離の概念操作が関わると論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語の近称・遠称の指示詞選択が、指示対象が話者に「近づく・離れる」といった「経路」に関わる動的要因ならびに方向性要因の影響を受けやすい一方で、日本語の近称・遠称の指示詞選択は、静的な位置関係によって決まる傾向が強いことが映像提示実験から示唆された。日本語の中称指示詞「そ」は人称指向と距離指向の空間ダイクシスの範疇化を併せ持つとする向きもあるが、英語と同様に基本的には距離指向の体系であると捉えることが可能であり、日英vs.韓という指示詞の括りが可能であるという考え方を示した。一方で、二人称による独白話者自称指示からは、英韓vs.日という括りが可能であることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study examined non-canonical demonstrative mappings and person-references, which have been analyzed as manifestations of “mental distancing” and “perspective shift,” casting light on some dynamic aspects of deictic referencing. First, this study revealed that the idiosyncratic uses of demonstratives could be best characterized in terms of orientation and fictive trajectory, further implying that such uses might be accounted for in connection with physical distancing (cf. embodiment), such as stepping back or stepping away. Second, it examined second-person pronouns referring to a speaker in solitude, arguing that conceptual manipulation of “a self-split of the speaker” gives rise to second-person pronouns for a speaker’s self-reference.

研究分野：認知・機能言語学

キーワード：ダイクシス 空間指示詞選択 人称指示 発話事象概念 対称詞による発話者自称指示 独白 発話参与者分離 心理的距離用法

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本語と韓国語の指示詞は、それぞれコ・ソ・ア, 이・그・저という近称・中称・遠称から構成される三項体系であり、両言語の典型的な現場(直示)指示の使用については類似・対応関係が見て取れる。その一方、英語は *this・that* の近称・遠称から成る二項体系であり、いわゆる中称を欠いている点で、日韓語とは異なるといえる。加えて、日本語は韓国語と同様に確立した人称指向システムを有するとされ、日韓語 vs. 英語とする分類が有力視される。ところが、日韓語の中称(「ソ」, 「グ」)については、その振る舞いが異なることが指摘されている。日本語の中称指示詞「ソ」は (i)聴者領域(*addressee proximal*)にある対象および (ii)話者から近くも遠くない中間距離的な位置の対象を指す。他方、韓国語の中称指示詞「グ」は聞き手領域にある対象を指示する一方、話者から近くも遠くない対象を指すことはない(生越 2009: 236-364)。この日韓の中称指示詞の振る舞いの違いは、両言語が依拠する範疇化原理(事態認識ないしは発話事象概念)の相違を反映していることを示唆している。

指示詞および指示表現は伝統的に話者(ないしは聴者)と指示対象との静的位置関係に基づいて特徴づけられてきた。しかし、空間的近接性にもかかわらず遠称(非近称)指示が用いられるといった事例、発話時には話者領域に存在しない対象が近づいてくる状況において近称(コ系)指示が用いられる事例、空間的に同じ静的位置関係にあるにもかかわらず言語間で指示詞選択が異なる事例などが観察される。これらの特異な指示詞選択について、それらは指示対象に対する嫌悪や無関心といった心理的隔たりに起因するとする「心理的距離」(Lyons 1981, Fillmore 1997)、聴者の視点から状況を捉える構図を想定する「視点シフト」などの理論的説明が提案されている。

本研究は、特異な指示詞選択の背後に、指示対象が話者に「近づく・離れる」あるいは話者が指示対象に「近づく・離れる」といった(動的)要因、更には指示対象が話者の視線に正対するか否かという(方向性)要因が関与する可能性を探る必要性があると考えた。

## 2. 研究の目的

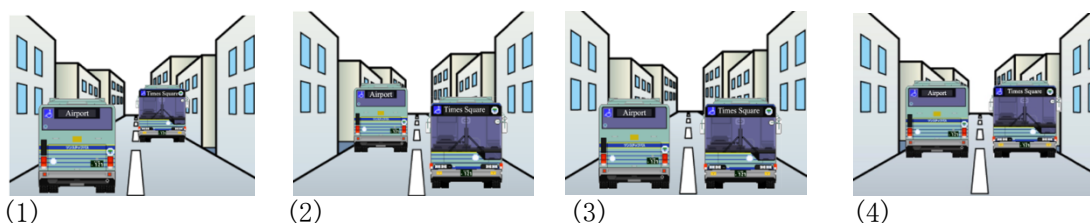
本研究は、日本語、韓国語、英語それぞれの指示詞の使い分けを包括的に対照分析することで、指示詞選択メカニズムの異同の本質に迫り、認知言語学的類型論に寄与することを目的とする。三言語の非規範的な指示詞選択事例を丁寧に対照分析し、その振る舞いの違いの背後にある認知的・語用論的要因を探る。その上で話者と聴者を一括りで扱う嫌いのあるステージ・モデル(Langacker 1991)や、細部が捨象された認知文法のグラウンド(*ground*)概念による先行研究では捉えきれない側面を明らかにする。

指示詞選択の動的側面については、国語学(cf. 富士谷(1767))では記述はされてはいるものの国内外の認知言語学的研究において理論的に十分解明されてきたとは言えない。本研究では(動的)要因に加えて(方向性)要因の働きについても検証する。また、心理的距離用法については、発話時に継起する展開、すなわち「近づく・離れる」といった話者と指示対象との位置関係の変化を予見する認知的基盤から統一的かつ理論的な説明を提案する。

### 3. 研究の方法

本研究は、指示対象が話者に「近づく・離れる」あるいは話者が指示対象に「近づく・離れる」といった〈動的〉要因、更には指示対象が話者の視線に正対するか否かという〈方向性〉要因を考察の中心に据え、視覚刺激提示実験によって指示詞選択の原理を探り検証した。

視覚提示刺激として、3種類の静止画像と、2つの動画を用いた。静止画像は、(1)後ろ向きのバス(バスの尾灯が見える)がより近くに大きく描かれた視覚刺激(i)、(2)正面向きのバス(バスの前照灯が見える)がより近くに大きく描かれた視覚刺激(ii)、(3)2台のバスが横並びに同じ大きさと描かれている視覚刺激(iii)から成る。動画は、(1)の配置から2台のバスが時間経過とともにそれぞれ進行方向に前進し(4)の横並び配置で終わる視覚刺激(iv)と、(1)の配置から2台のバスが時間経過とともにそれぞれ進行方向に前進し完全に行きちがい(2)の配置に至る視覚刺激(v)の2種類である。これら5種類の視覚刺激を提示した後、「このバスどこゆき」、「Where is this bus heading for?」のように尋ねて近称で指示されるバスがいずれか検証した。



独白文脈における話者自称指示については、日韓英語の母語話者への聞き取り調査を実施し、多様な一人称を持つ日本語について Google Form を用いたアンケート調査を2回実施して調査（総被験者数 90 名）を行った。

### 4. 研究成果

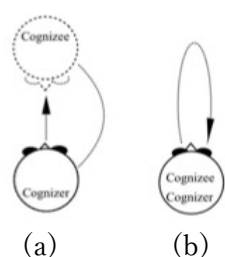
本研究では、非規範的な直示指示の対照研究として、空間直示指示表現と独白文脈における二人称による発話者自称指示を取り上げ、「発話事象概念」(speech event conception)の違いとして認知類型論的な観点から分析を試み、従来とは異なる類型的括りの可能性を示唆した。

空間的直示表現については、大きくは二つの議論を展開した。一つ目は、韓国語と日本語の中称指示詞が質的に異なることを踏まえつつ、基本的に話者と指示対象との距離指向に基づく空間直示指示体系と見做せる英語および日本語と、徹底した人称指向に基づく空間直示指示体系である韓国語とに類型的に括り得ることを指摘した。日本語の中称指示詞ソについては、人称指向と距離指向の空間ダイクシスの範疇化を併せ持つと議論される向きもあるが、英語と同様に基本的には距離指向の体系である捉えることが可能であり、この考え方に立てば、日本語と英語 vs.韓国語と括られるという考え方を示した。二項から成るのか三項から成るのかという類型ではなく、話者と聴者が〈並び立って〉同じ方向に視線を投げかけているのか、あるいは話者と聴者が互いに〈向き合っている〉のか、といった「発話事象概念」こそが、日韓英の指示詞の振る舞いを説明するメカニズムである可能性を指摘した。

二つ目は、英語と日本語の空間指示における近称指示詞（表現）の指示に関して観察および分析を行い、日英語いずれの近称指示詞選択も〈動的〉(fictive trajectory)〈方向性〉(orientation)といったダイナミックな要因、さらには想起する場面に伴う百科辞典的知識の影響を受け得るが、その程度において両言語は振る舞いが異なることを示した。日本語母語

話者の一部が2台のバスが横並びに同じ大きさで描かれている状況(3)において、近称指示表現「このバス」の指示する対象の特定に戸惑う一方で、英語母語話者は静止画刺激(1)-(3)すべてにおいて指示対象の同定が難しいとする傾向が見られた。また、日本語話者が近称指示で距離的に近い方のバスを指示する傾向を示す一方で、英語母語話者は近づいてくるバスを指示する傾向が見て取れた。この結果から、英語の近称(this)・遠称(that)の指示詞選択が、指示対象が話者に「近づく・離れる」といった「経路」に関わる〈動的〉要因ならびに〈方向性〉要因の影響を受けやすい一方で、日本語の近称コ・遠称アの指示詞選択は、動画においても最終局面における静的な位置関係によって決まる傾向が強いことが明らかになった。

本研究では、もう一つの特異な直示指示として、独白文脈における二人称による話者自称指示について日韓英語の振る舞いを対照した。対話文脈では、英韓日語いずれの話者も二人称(対称)で自称することはできないが、話者が自らを〈鼓舞〉(self-encouragement)ないし〈叱責〉(self-blame)するといった独白文脈では、英韓語双方で一人称に加えて、二人称による発話者自称指示、さらには話者自身の名前(呼格)による指示が可能であるが、日本語では二人称による発話者自称指示も話者名呼格も一般に容認されにくい。これを踏まえ、英語は主語参与者(独白話者)を統語上明示しなければならない点で韓日両言語と異なるが、概念化においては英韓 vs. 日の類型括りが示唆されることを指摘した。独白文脈における二人称(対称)および呼格による発話者自称指示の英韓日語の異同に基づき、英韓語に観察される二人称及び呼格による発話者自称は次の(a)に図式化されるように独白話者が自らを〈語る自己〉(Cognizer/Conceptualizing-self)と〈語られる〉(Cognizee/Conceptualized-self)に分裂させ、後者を聴者に見立てる疑似対話様式を反映していると捉えられる。独白に特異なこういった自称指示を一般に許さない日本語は(b)に示すような自己分裂を伴わない真性独白様式と呼べる概念化を反映すると論じた。また、独白におけるこれらの二つの概念化様式は、現場指示の範疇化から導かれる2つの異なる「向かい合う」「並び立つ」対話事象概念が互いに関連し合い動機づけ合っている可能性を指摘した。



日本語の発話者自称については、対話者との関係性に応じた人称選択(例:俺、僕、私、先生、お父さん)が行われることが指摘されている。二人称による話者指示が難しい日本語の独白は、聴者を想定しない再帰的発話(真性独白様式)を反映すると考えられる主張した。聴者が存在しない独白においては、そもそも関係性に基づく人称選択は生じ得ないことが予測され、絶対的自己(cf.「私的自己」 Hirose & Hasegawa)とでも呼ばれる自己を指示する表現が期待される。しかし、日本語母語話者への Google Forms を用いた2回の予備的調査(総被験者90名)では、オレ、ボク、アタシ、ワタシが有意に第一候補として好まれる一方で、ジブンはそれに遠く及ばなかった(ただし、若年層女子に限ってはジブンを話し手指示の第一候補とする一定の傾向が観察された)。再帰代名詞ジブンは平叙文では話者を指示

する一方、疑問文では聴者を指示する点で他の人称詞とは質的に異なることを指摘しつつ、有意に第一候補として好まれたオレ、ボク、アタシ、ワタシは聴者との関係性に依らず、話者がもっとも自分らしい自分を表す表現として用いていることを強く示唆していると論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 KOGUMA Takeshi、IZUTSU Katsunobu、小熊 猛、井筒 勝信	4. 巻 26
2. 論文標題 What 's my name in absolute solitude?: The essence of monologic selves in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化論叢 = Studies of Language and Culture	6. 最初と最後の頁 19~31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00065810	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 KOGUMA, Takeshi, IZUTSU, Katsunobu, Yong-taek KIM	4. 巻 15
2. 論文標題 Monologic Deixis: Two Distinct Conceptions behind Reflexive Speech Event	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 169-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 KOGUMA Takeshi、IZUTSU Katsunobu、小熊 猛、井筒 勝信	4. 巻 27
2. 論文標題 Proximal Demonstrative Mapping in Japanese and English: Orientation and Fictive Movement	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化論叢 = Studies of Language and Culture	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Takeshi KOGUMA, Katsunobu IZUTSU
2. 発表標題 What 's my name in absolute solitude?: the essence of monologic selves in Japanese
3. 学会等名 17th International Pragmatics conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takeshi KOGUMA, Katsunobu IZUTSU, Yong-taek KIM
2. 発表標題 Monologic Deixis: Two Distinct Conceptions behind Reflexive Speech Event
3. 学会等名 日本語用論学会第22回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takeshi KOGUMA, Katsunobu IZUTSU
2. 発表標題 Proximal Demonstrative Mapping in Japanese and English: Orientation and Fictive Movement
3. 学会等名 9th International Conference on Intercultural Pragmatics and Communication (INPRA2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takeshi KOGUMA, Katsunobu IZUTSU
2. 発表標題 Self-Addressing in Monology : A Cross-linguistic Perspective
3. 学会等名 5th International Conference of the American Pragmatics Association (AMPRA 2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小熊猛、井筒勝信
2. 発表標題 見えないダイクシス - (?)なんだあのいい匂いは? -
3. 学会等名 第46回福岡認知言語学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 菅井 三実、八木橋 宏勇(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 416
3. 書名 認知言語学の未来に向けて	

1. 著者名 町田 章、木原 恵美子、小熊 猛、井筒 勝信	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 認知統語論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金 智賢  (Kim Jihyun)  (40612388)	宮崎大学・多言語多文化教育研究センター・准教授   (17601)	
研究分担者	井筒 勝信  (Izutsu Katsunobu)  (70322865)	北海道教育大学・教育学部・准教授   (10102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------